

# 今、日本の危機に立ち向かう人を育成する

学校法人皇學館 理事長  
佐古 一洌



さこ・かずきよ氏

1941年 生まれ  
1966年 皇学館大学文学部国史学科卒業  
1969年 皇学館大学大学院文学研究科国史学専攻修士課程修了  
神宮出仕  
1977年 神宮宮掌  
1978年 神宮権祿宜  
松尾大社祿宜  
1981年 松尾大社権宮司  
1989年 神宮評議員(現在に至る)  
1992年 松尾大社宮司(現在に至る)  
1992年~01年 京都府神社庁副庁長  
1997年 学校法人皇学館大学評議員(現在に至る)  
1998年 京都府神社庁駐在教諭師(現在に至る)  
神道講演全国協議会副会長(現在に至る)  
2004年 神職身分特級  
2008年 学校法人皇学館理事長就任(現在に至る)  
学校法人皇学館理事長就任(現在に至る)

## 近代日本の歴史とともに

三重県伊勢市の皇學館大学は、近代日本の歴史とともに歩んできました。本学の創立は明治15年。文明開化によって西洋の文化が大量に日本に流れ込む中、近代化を急ぐあまり、人々は日本古来の伝統や文化を過小評価してしまいました。これに危機感を抱いた当時の神宮祭主・久邇宮朝彦親王の手によって伊勢神宮の学問所の中に開設された「神宮皇學館」が本学の始まりでした。明治33年に神宮祭主・賀陽宮邦憲王から賜った令旨には、「わが国の歴史と伝統に根ざした道義と学問を学び、日本人としての正しい自覚を確立し、実社会での運用に努め、世界の文明の発展に貢献する」という本学の建学の精神が記されています。明治36年には内務省所管の官立専門学校となり、昭和15年には国立の「神宮皇學館大学」へと昇格しました。しかし敗戦後、連合軍総司令部(GHQ)が発した神道指令により、神宮皇學館大学は廃学の憂き目を見ることになりました。

その後、日本が奇跡的な経済成長を遂げたことは周知です。しかし、その影で再び日本のところが失われつつあることを危惧した卒業生らが崛起し、昭和27年に神宮皇學館大学復興期成会を設立。そして幾多の苦難を乗り越え、昭和37年、文学部国文学科と国史学科の私立大学「皇學館大学」として悲願の再興を果たしたのです。再興後の初代総長を務めた元首相の吉田茂氏の言葉「皇學館大学は、どこにでもある大学であってはならない。小さくても、日本人の心を持った本当の日本人を育てる大学でなければならない」が、当時の大学関係者の思いを表わしています。その後、時代の変化に合わせて学部・学科構成の刷新が行われ、今日では文学部・教育学部・現代日本社会学部・社会福祉学部の4学部・7学科と大学院・専攻科を擁する大学になりました。

## 日本を学ぶことが国際人への第一歩

日本の伝統文化を見直し、世界に通用する人材を育成する。本学が創立から一貫して守り続けてきたこの精神は、今日も変わることはありません。その具現化のため、本学では新入生全員が受講する共通科目の中に「皇学」「伊勢学」「伝統の心と技」といったユニークな授業を用意しています。

「皇学」では15名の教員がオムニバス形式で教壇に立ち、それぞれの言葉で建学の精神と本学で学ぶ意義・目的を伝えます。「伊勢学」では、日本人の心のふるさとである伊勢の歴史と文化を学びます。学生たちは、その年に収穫されたお初穂を伊勢神宮に奉納する伝統の祭事である「初穂曳き」に参加し、日本の文化を自ら体験します。「伝統の心と技」では、日本の武道や茶道、能、雅楽、礼法、伝統建築・工芸など、さまざまな伝統文化を全員が修得し、自分の中にある「日本人らしさ」を発見し、将来に向けた精神的な「強さ」を育みます。これらは、決して旧き良き日本を学ぶことだけが目的ではありません。「最も民族的なものこそ、最も国際的である」といみじくもゲーテが指摘した通り、自分が日本人であることを認識し、自国の伝統や文化を畏敬することから、他国・他民族を理解する心が芽生えます。それが、真の国際人を育てるということだと思います。

さらにこれらの教育を基礎として次代の日本のリーダーを育成するため現代日本社会学部においては、「キャンパスセミナー」や「産業社会実習」などの独自のカリキュラムを設けています。「キャンパスセミナー」では学生が主体となってプロジェクトを興し、学生の力で市場の調査・分析を行い、最終的に事業化をめざすという5つのプログラムが進行中。こうして全員がビジネスに主体的に関わる力を養うことで、未来の日本のリーダーにふさわしい実践力の育成にも力を入れています。

## 創立130年目の原点回帰

日本の歴史上、明治維新・第二次大戦後という2つのアイデンティティの危機があったと述べました。実は今、我々は3度目の危機に直面しています。日本人が大切にしてきた「自然に感謝し、周囲と調和する」という価値観が色あせ、「自分さえ良ければいい」という行き過ぎた個人主義が横行しているように思えます。この難しい時代に本学に何ができるのか、これから全員で考えなくてはなりません。

平成24年、本学は創立130周年(再興より50周年)を迎えます。これに向け、私たちは日本の未来と学生の将来を見据えた大学改革に取り組んでいきます。現在、130周年記念事業として教育研究棟などの新築工事が進行中です。また、「神宮の総合的研究」・「続日本紀史料」編纂事業の完結等や、130年の「館史」の編纂など、研究関連でもさまざまな事業を計画しています。中でも最大の変化が、名張キャンパスから伊勢キャンパスへの社会福祉学部の移転です。神道に「元々本々」(はじめをはじめとし、もとをもととす)という言葉があります。これまで伊勢と名張の2つのキャンパスを展開してきた本学が、原点である伊勢一極集中に戻り、新しい気持ちで再スタートする。これが本学にとっての「元々本々」です。現在、伊勢キャンパスに移る学生がスムーズに学業を継続できるように準備を急いでいます。

この大学改革は、経営陣や教員はもちろん、職員も一致団結して取り組むべき問題です。大学の危機とは、社会環境の変化ではなく、その変化に気づかない人間の存在なのです。私たちは全員が高い問題意識を持って現状を分析し、自発的に行動していきます。今、日本が直面しているのは、史上最大の危機かも知れません。歴史を振り返れば、日本には良い時期も悪い時期もありました。しかし我々は、叡智と努力によって危機を乗り越えてきました。今から取り組めば、日本はきっと大丈夫。私たちはそう信じています。 ■